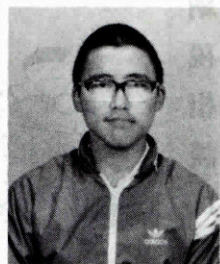


# 文化祭読書感想文特選入選作品

## 「河童」を読んで

菱海中学校三年 上野博至



上野博至君

「後ろにある岩の上には河童が一匹、片手は白樺の幹を抱え、片手は目の上にかざしたりなり、珍らしそうに見おろしていました。」これが彼と河童の出会いだったのです。

おもしろい作品だった。読み始めて最後まで息つくひまもない物語の展開。登場人物(河童)の個性、ひょうきんな格好を思いうかべながら読んだ。

この「河童」では作者の心情がユーモアたっぷりに皮肉を混じえた文章で語られている。物語の舞台を河童の国にするという発想も素晴らしい。

このように動物の世界を舞台にした作品では「山椒魚」なども授業でならったが、動物の世界になぞらえて人間社会での風刺や皮肉などの作者の意図がみえ、ユニークな発想力が随所にみられる。

なかでもおもしろかったのは河童の恋で、現在の人間とは全く異なり、雌の河童が雄の河童をひた

すら追いかけまわしてつかまえるというからすごい。人間社会もこうなったらさぞすごいだろうなとおかしかった。

また、工場で作られる無数の本がろばの脳髓から出来るという話や、その進歩した機械化のために失業した河童を殺してその肉を食べてしまおうという話のおもしろさは次から次へとうつつくる。

さらにユニークなのが河童の国での死刑は罪状を言ってきかすだけということだ。それだけで河童の微妙な神経はとりつかれたように麻痺して、ついには自殺してしまうという。このことは死刑の場合だけでなく殺人(殺河童)にも当てはまるらしい。ある河童は憎まれていた河童に「貴様は盗人だ」と言われただけで心臓麻痺を起こしかけたという話は滑稽だけでなく興味つきない問題である。

彼ら河童の過敏な神経は、頭でっかちな現代人の象徴として奇妙な劇とマッチして不思議とおかしくなる。また自殺だけでなく、ひんぱんにおこる犯罪社会への抵抗をあらわしている。

そんな数々の作者のいきどおりが河童の国を生み出したのであろう。河童の国での社会も河童たちの考え方も僕らには合点のいかないう奇妙なことが多く、話を楽しく

すめている。しかし、精神病的な河童が人間の社会の正義や人道とかいことがまたおかしく書かれていた。確かに僕ら人間は正義とか言っておきながら、その反面言葉にあわないことが多いのが現状だ。それを河童が笑うしくみになっているが、人間社会への挑戦だと思ふ。この、作者が生み出した河童の国は決して理想の国ではない。また、理想の国である必要はないのだと思う。現代の社会への不満を皮肉って考えさせられる。それだけで世の中への疑問を讀者に抱せると共に作者の潔癖な悩みがうかがえる。作者の苦悩は孤立無援のものではなく、多くの読者の疑問へと社会の矛盾を訴えている。

今世の中に疑問をいだくことが多くあるのなら、僕らは今まで何も気付かずに見すごしてきたのかもかもしれない。気付かなくても当然のことのように思っていたのだろう。もしも僕だけでなく世の中の大半の人たちが何も気付いていなければ、責任は僕たち何も気付かなかった者にあると思う。

今の社会があまりにも無責任だからこそ河童の国へ行ってきた男は精神病院に入らざるを得ないほど悩まなければいけなかったのだろう。彼こそ世の中の疑問を最初

に最も強く感じた作者の姿だと思う。

「出て行け、この悪党めが」。なによりも僕に強烈な印象を与えたのは冒頭のこの一文だ。

この一文こそ作者が僕たちに訴えようとしているすべてを暗示しているのではないだろうか。社会へのいきどおりも、そこから生じてくる自分への腹立たしさも、作者の一連の作品に見られるものが集大成されているようだ。

作者は人一倍に敏感であるがゆえに大きな壁にぶつかり、そしてあえいだ。

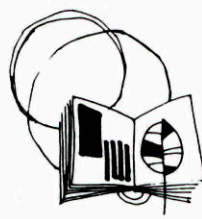
しかし、毎日学校へ行き勉強の出来る幸福な環境に生まれた僕たちは何をしてきたのだろうか。毎日のんびりとすごし、その毎日がどのような犠牲のもとに生まれたかも知らずわがもの顔に外を歩いている。

僕たちは今一度考えてみる必要があるのではないだろうか。自分の生活態度を。

「河童」は皮肉やユーモアがたくさんありおもしろい作品だが、おもしろいだけでなくもう一歩進んで考えてみなければならぬ問題を警告していると思った。住みにくい社会、エゴイストの人間、それを傍観するのでもなくどこかで接点を見出し、たのしくするのでも人間である筈だ。そこを考え、一人一人が世の中を明るくする使命を良くたもつ人にならねばと思うのである。

《この感想文はこのほど文化祭の参加行事の一環として募集され、特選に入賞した作品です。》

### 新刊図書案内



- |              |       |
|--------------|-------|
| 京まんだら(上・下)   | 瀬戸内晴美 |
| 風の歌を聴け       | 村上 春樹 |
| 街道伝奇         | 陣出 達郎 |
| 男と女のあいだには    |       |
| (上・下)        | 五木 寛之 |
| 太陽黒点         | 森村 誠一 |
| ころ(上・下)      | 瀬戸内晴美 |
| 正四面体         | 三浦 朱門 |
| 暴れ姫君         | 山手樹一郎 |
| 私の宝箱         | 加賀 乙彦 |
| 透明な季節        | 梶 龍雄  |
| 冬の光景         | 水上 勉  |
| 神様、何故愛にも     |       |
| 国境があるのノ草鹿    | 宏     |
| 武田勝頼(一・二・三)  | 新田 次郎 |
| 沿線地図         | 山田 太一 |
| 雲上飛行         | 福本 和也 |
| 知的恋愛の本       | 富島 健夫 |
| どかんたれ人生      | 黒岩 重吾 |
| 十八歳の湖        | 中川あいつ |
| 三国志(一・二・三・四) | 吉川 英治 |
| 項羽と劉邦        | 司馬遼太郎 |
| 上役のいない月曜日    | 赤川 次郎 |
| 嫁さんをもったら     |       |
| 読む本          | 梅田 春夫 |
| 黒革の手帖(上・下)   | 松本 清張 |
| 山肌(上・下)      | 丹羽 文雄 |
| 流砂(上・下)      | 井上 靖  |
| ムツゴロウの野生教育畑  | 正憲    |
| ふたつの文化の間で    | 広中和歌子 |